19世紀末西欧における日本観光と日本イメージの形成 —マレー社の『日本旅行案内』に紹介された京都—

The Japanese Sightseeing and the Formation of the Japan Image
of the Western Europe at the End of the 19th Century

田中まり
Mari Tanaka

既に本論集35巻2号において、多くの危険を伴う困難な移動であった「旅」が気軽に楽しめる「観光旅行」となり、しかも広く大衆の一つに娯楽に数えられるに至ったプロセスを概観しているが、そこでまず確認されたことは従来の「旅行」と十九世紀後半に急増した「観光旅行」の質的な差異であった。もちろんかつての「旅行」と「観光旅行」は一見して利便性や安全性などに大きな差が認められるが、特に「観光」という要素が旅行の中心となったことが旅行者の意識を大きく変えたといわれている。

近代ツーリズムの基礎を築いたことで有名なトーマス・クック社の150年にわたる歩みを詳細にまとめた大著『トーマス・クック物語』の著者ピアーズ・ブレンドンは十九世紀半ばから盛んになったエクスカーションや団体ツアーといったツーリズムの特色をそれまでの旅行と比較して「観光 tourism とは、良く知っているものの発見だということである。(これに対し、旅行 travel とはよく知られていないものの発見であり、探検とは知られていないものの発見である)」(117ページ)と定義している。つまり彼によれば「観光」のポイントはすでに何らかの方法で「知っている」ものを確認に行くというところにあるようである。

「観光」を文化的現象の一つとして分析するジョン・アーリも、観光の対象の既知性に「観光」の本質を見る。彼によれば「観光」の本質は旅行者があらかじめ「見るべき」対象を知っているうえでその対象に注ぐ「まなざし」であるとしている。したがって旅行者がある場所を「見るべき場所」として見た瞬間、そこは「観光地」になるのであり、あるものを「見るべきもの」として見た瞬間、従来の旅行における物珍しい未知のものを見回していた視線とは質的に異なる「観光」の視線が生じるのだと主張するのである。

一方実際の観光の現場から出発して現象としての「観光」を分析する橋本和也は「観光」の文化的周縁性に着目する。橋本の定義によれば「観光」は「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買する」行為である。「異郷」には日常からの離脱体験が、「ほんの少し」「一時的」という表現には体験される異文化体験が表面的で、時間的にも限定された安全な範囲内にとどまることが示される。また橋本が特に重視する「観光」の消費的側面は「売買」という言葉によって表される。「よく知られている」については、より厳密には「よく知られていると意識されている」ということであろう。また橋本の定義には観光の対象となる側の視点も含まれる。橋本によれば、ある地域に異なる文化圏の外来者が侵入し、そこで自らの文化的コンテクストのままに行動すれば、当該地域の文化的コンテクストを大きく攪乱することとなる。当然それを放置すれば相互に摩擦・衝突をひきおこすであろう。その回避のために設けられた緩衝地帯が「観光」領域

だというのである。よって外来者との交易の場ともなる「観光」領域は、住民側にとっても周縁的存在であり、そこで売買される文化の真正性は問われない。むしろ現地の文化的コンテクストを侵害しないためには、ある程度偽物であることすら望ましいといえよう。

「観光」の特性においてアーリと橋本の両者に共通しているのは、旅行者が観光の対象となる「見るべきもの」を「すでに知っている」という点である。それでは何が「見るべきもの」であり、どのようにして西欧の一般の市民たちはそれを知るにいたったのであろうか。欧米では旅行記は文芸上の一ジャンルを形成しており、古くから旅行者は何らかの覚え書きを残していることが多いが、十九世紀にはいるとそれらに加えて交通手段や「名所」を明記した旅行案内書が数多く出版されるようになった。1836年にロンドンのジョン・マレー社が旅行ルートと名所を掲載した旅行案内書を出版すると、それを追いかけるように1839年にはドイツでも「駆け足旅行者のための案内書」というサブタイトルの旅行案内書が出されたのである。これが旅行書の古典「ベデカー」の起源となった。これらの旅行案内書はより具体性を持って一般の市民たちに対して、どこに何が何を見るべきかを教えるとともに、彼らの旅行願望を高めたと推測される。

もちろん「観光旅行」を「商品」化した旅行代理店にとっても旅行案内書は顧客創出の大きな原動力であった。しかも彼らにとって旅行案内書は単に旅行願望を刺激する以上の役割を担っていたと思われる。というのも満足した顧客による評判こそがさらに大勢の顧客を魅きつける最大の宣伝となることを考えれば、顧客が払ったコストに十分見合う満足感を得られるかどうかツアー成功の鍵を握っていたのであり、そして顧客の満足度は旅行の快適さもさることながら日常からの離脱が明確に意識できるような非日常的メルクマールの量や質に大きく左右されると考えられるからである。そこで彼らは旅行日程に珍しい体験や名所巡りを効率良く盛り込むと同時に、その効果をより増幅させるためにパンフレットや旅行案内書によって旅行者に注目すべき事物を予習させ、旅行を終えると回想させようとしたのである。もちろん旅行中にガイドがそれに注目するように促したのはいうまでもない。

開国によって日本が西欧世界に知られるようになったのは、ちょうどこの、欧米で「観光」旅行への関心が高まり次々に新しいツアー企画が生み出されつつある時期であった。さしずめ長い鎖国の後に神秘のベールを脱いだばかりの極東の島国は格好の旅行先であったに違いない。事実開国からそう遠くない明治五年(1872)にトーマス・クック社の創立者であるトーマス・クック自身が自らの顧客たちと共に世界一周旅行の途上、日本を訪れている。クックは瀬戸内海をヨーロッパのさまざまな湖の眺めと比較して「ここはそれらのどこよりも素晴らしく、

それら全部の最も良いところだけとって集めて一つにしたほどに美しい・我々はあまりにも豊かな自然の恵み、次々に移り変わって終わることを知らない景観の美しさに呆然としてしまった」(『トマス・クック物語』249-250ページ)と絶賛したのははじめとして日本の寺院建築の装飾に感動し、伝統工芸品を中心とした土産物にも魅力を感じたという。さらに彼は経験豊かなツアーの企画者らしく宿泊施設やそこで供される料理、鉄道などの交通機関にも目を配っている。その観察によれば横浜に建てられた純英国風のホテルは外観ばかりでなく食事にも上質の牛肉が出されたということであるし、英語の表示も多く、鉄道でも英語が通じたという。もちろんこのような状況は当時はまだ大都市近郊に限られたことであったが、伝統文化を残しながら西洋文明を積極的に取り入れようとする日本の姿勢にクックは大いに好感を持ったといわれている。とはいえずぐに日本に観光の波が押し寄せたわけではない。

幕末から明治初期に来日した欧米人の記録を読むと、彼らが「観光」化以前の日本で非常に苦勞した様子がかがわれる。おそらく彼らの中の何人かは、ようやく門戸を開いたこの未知の国に強い興味を抱いて渡航してきたのであろうが、多くは外交や学術調査、教育や技術指導、伝導などの仕事に就くために訪れ、外交官・外国人講師・技師などとして日本に滞在していた。したがって日本滞在中の旅行も仕事上の必要から行われることが多く、学術調査的・探検的要素が強かったのである。つまり日本は当時の欧米にとってブレンドンの定義でいうところの「未知」の領域であったといえよう。

一方、世紀転換期に来日した欧米人の旅行記からは全く異なる様子がかがえる。そこに書かれているのはまさに「観光」の記録といってよいであろう。その間の変化としては、交通機関や宿泊施設が長足の進歩を遂げたというハード面の整備とならんで、日本に関する知識が格段に増えていたことが大きいと思われる。すでに明治初期の来訪者たちが日本の自然や文化を紹介し、新聞は現在の日本について報じていただけでなく、実際の旅行に役立つ実用的な情報を載せた詳細な旅行案内書まで出版されていたのである。つまり先のブレンドンによる「観光」の定義に基づけば、このように日本は欧米にとって「よく知られたもの」となったことで、ようやく「観光」の対象となりえたのであった。

本稿では日本を「よく知られたもの」とした日本紹介書のなかで特にマレー社の『日本旅行案内』を取り上げる。ジョン・マレー社は先述のように旅行案内書の定評ある老舗の一つであった上に、この書は日本に関する本格的な案内書としては最も早く1881年に『中央部・北部日本旅行案内』として初版が1884年には第二版がでている。1891年に出た第三版以降は日本全域を対象とする『日本旅行案内』となり、その後の類書にも多大な影響を与えながら6回の改訂を経て長く読まれ続けたといわれている。したがって世紀転換期に日本を訪れた外国人旅行者の多くが、日本を「よく知られたもの」として「観光」するためにこの本を携えて来たと考えられるのである。事実幕末に外交官として日本を訪れ1906年にイギリス皇太子に随行して再来日したミットフォードは、この『日本旅行案内』について「この種の本で、これに匹敵するようなのは滅多に書かれたことがない」(『ミットフォード日本日記』212ページ)と絶賛している。ミットフォード自身も日本の伝説や話を収集して『古い日本の話』として出版したほどであったから、それぞれの名所にまつわる伝説的・歴史的エピソードにまで触れているこの本の編集方針には特に共感を覚えたであろう。さらに

初版・第二版の著者の一人が、幕末から明治にかけて長く日本に滞在して日本の自然や文化に対して深い理解を持ったイギリスの外交官アーネスト・サトウ(共著者は日本海軍の創設に尽力した海軍士官アルバート・シドニー・ホーズ)であり、第三版以降の著者の一人が、やはり明治初期の来日以後四十年を日本で過ごし日本語の研究や古典の翻訳を始めとして日本の紹介に力を注いだバジル・ホール・チェンバレン(共著者はウィリアム・ベンジャミン・メーソン)であるという点も注目に値する。彼らは自国の観光客が日本に何を求めているかをよく心得ており、またそのような要求に対して日本人が何を提供できるかも熟知していた。したがって彼らが「見るべきもの」として選んだ日本の姿は、観光する側の欧米の旅行者からすれば、彼らの興味に沿ったエキゾチックな「日本」であり、観光される側の日本人からみれば、周縁の「観光」用緩衝地帯にある、作られた「日本」となっている。今回は特に京都についての記述をもとに、外国人観光客が期待した「日本」はいかなるものであり、それに対して日本人が用意した観光空間がいかなるものであったかを考察したい。なお今回用いた『日本旅行案内』は1913年(大正二年)に出された第9版によっている。

1 『日本旅行案内』における京都

京都及びその近郊(嵐山、比叡山、高尾山、鞍馬山、石清水)は『日本旅行案内』の37番目のコースとして約30ページを費やして詳しく述べられている。琵琶湖は旅行プランのなかでは比叡山の代案として現れるが『旅行案内』には別のコースとして記載されている。京都へのアクセスは「神戸から」鉄道で1時間45分、まず神戸に船で到着することを想定しているであろうか。宿泊施設や食堂が簡単に紹介され、郵便局や電信局の位置がそれに続く。このあたりは旅行の快適さを保証するための最低限の情報といえよう。様々な土産物に関する情報には、随所に文化の緩衝地帯としての観光空間が観察される。京都は陶磁器、つづれ織りや錦、青銅細工、漆塗り、象眼細工、七宝の産地ということで、購入に際して推薦できる店が挙げられているが、その選定が興味深い。まず陶磁器では粟田にある粟田焼の窯元「錦光山」が紹介されている。ここはサトウの『日本旅行記』によれば「値打ちにうとい西洋人の需要を目当てに大量生産」する窯元であり、「非常に大きく幅広く輸出している」(277ページ)一種の陶器製造工場といった様相を呈していたらしい。『旅行案内』にも「輸出用に大規模に工場生産が行われている」と説明されている。陶磁器に興味のあったサトウやエドワード・シルヴェスター・モースは京都やその近郊の大小の窯元をまわって陶工たちに様々な質問を試みたらしく、彼らの旅行記にはその模様が記録されているが、ここではそのような特色ある窯元についてはまったく触れられていない。小規模の窯元は日本語が通じるサトウが訪れてすら対応しきれない場合があり、また一般の観光客にはそこまでの関心はないと判断したものと思われる。その意味で西洋向けの陶器を工場方式で生産する「錦光山」は、確かに真正性という点で多少問題があったとしても、欧米の観光客にとっては分かりやすく、日本人にとっては対応の煩わしさを避けることのできる文化的緩衝地帯であったといえるであろう。また特産品とはいえないが、武器や鎧の骨とう品の需要がよほど高かったのか、専門骨董店の名前や骨董店が並ぶ通りにも触れている。さらに竹細工や扇子、人形、玩具といった土産物についての記述が見られるのは、やはり値段も大きさも手頃な記念品が求められていたものであろうか。外国人旅行者はサムライを思い起こさせるエキゾチック

クな武器、繊細な工芸品、愛らしい細工物に「日本」のイメージを重ね、他方日本人はもはや自分たちの日用品とはいえなくなった品々をある程度アレンジしつつ生産していたのであろう。ここにも現地の実地の生活から切り離された観光のシステムがうかがわれる。

市内観光の際の交通機関については、『旅行案内』は市内電車よりもむしろ小回りの利く人力車や馬車を勧めている。自動車は徐々に増えては来ていたものの、第9版の改訂の時点(1913年)ではまだ観光に利用できるほどには普及していなかったとみられる。また信頼のおけるガイドはホテルで雇うようにというアドバイスと共に、カトリック教会の位置やプロテスタントの礼拝に関する情報が記載されているのは、当時の欧米の旅行者たちの宗教心の強さばかりでなく、旅先でも自国での生活習慣を継続させようとする姿勢の一つととらえることもできよう。

次に『旅行案内』は京都観光の重要なポイントとなる名所について概観する。しかし幕末期に来日した欧米人たちの見聞記に感動的な筆致で登場し、当時大いに欧米人の関心を引いていたと思われる御所や離宮に関しては、残念ながら非公開で外務省を通じた特別許可が必要であり、コネや時間に余裕のない旅行者は他の建築物を眺めることで手軽に同等の満足を得るよう勧めている。御所の代りとして挙げられているのは粟田宮(青蓮院)その他の寺院建築であるが、これらの建物が一時御殿として使用され、御所と共通する様式をもつという説明は、あきらめきれない観光客をも納得させるであろう。京都の他の建築物としては三十三間堂、西本願寺、東本願寺、清水、祇園、知恩院、大極殿、さらに日本の美意識の典型的な産物として金閣寺あるいは銀閣寺のいずれかを必ず見るように勧めている。またパノラマ的な眺めが好まれるようになった時代ならではの記述ともとれるが、京都を一望できるビューポイントとして知恩院の裏手の將軍塚、あるいは高台寺裏の招魂碑、八坂の塔、清水寺などの名前がみられる。

さらに『旅行案内』は季節の風物として、春の「都踊り」、夏の川床の夕涼み、祇園祭を始めとする様々な祭りを紹介している。なかでも「都踊り」や歌舞練場で催された同種のイベントは世紀転換期に日本を訪れたドイツの作家マックス・ダウテンダイ、外交官として日本を再訪したミットフォードらもその美しさを絶賛しているほどで、外国人には大変人気の高いイベントであったと思われる。おそらく通常は伝統的な舞踊は小規模な座敷などで行われていたのであろうが、ここでは外国人向けのアトラクションとして大掛かりに一種のショー形式で上演し、演目もあまり物語の筋立てのない、外国人に理解しやすいものが選ばれたらしい。踊り手を養成する「女紅場」も公開されており、踊りを習う少女たちが茶道や華道の指導を受けるところを見学できたという。日本の伝統舞踊を教えるという点ではエキゾチックであり、学校的な形式をもっている点では欧米人にも理解しやすい。ここもまた一つの観光空間となっていたといえるであろう。

『旅行案内』は京都を表面的にでも理解するための日数として最低でも一両日、少し深く理解しようとするれば一週間は必要だとして、一週間の京都観光のモデルプランを提案している。プランは各方面ごとに最小の移動時間で多くの名所を見学できるよう効率よく組まれており、前日にまわりきれなかった場合は翌日中断した場所から始めてもいいということである。このようなプランが必要なのも、東京遷都以降の京都はかつてに比べて規模が縮小して観光名所のある場所も街はずれとなり、移

動に時間がかかるようになったためらしい。ここで面白いのは時間節約のためにサンドイッチなどの軽食の持参を勧めている点である。まだ欧米人の味覚に合うような料理を出す店は限られていたこと、多くの旅行者はそのためにホテルに戻って昼食を済ませていたらしいことがうかがえる。

そのモデルプランによれば、一日目から四日目までは京都市内観光、五日目は嵐山や嵯峨野、六日目は比叡山か琵琶湖畔を巡り、七日日には買物に充てることになっている。京都市内観光のルートを詳しくいえば、一日目は、中には入れないもののせめて外壁だけでもということ御所の周囲を巡り、そこから北野天神、金閣寺へまわって、等持院、二条城など街の中心部へ向かい、二日目は南へ下って東本願寺からさらに伏見稲荷へ下り、引き返して東福寺、三十三間堂、大仏、美術館をまわる。三日目は東山界隈に沿って西大谷から始め清水寺、八坂の塔、高台寺、裏手から將軍塚に登った後、円山へ降りて東大谷、祇園、知恩院へ。四日目は粟田宮から大極殿、南禅寺、永観堂、黒谷、真如堂、銀閣寺、修学院または上賀茂、下鴨をまわることになっている。また特に時間に余裕がない人々のためには一日コースのプランも示され、それによれば朝に東本願寺から出発し、午前中に三十三間堂、美術館、知恩院をまわり、昼食をはさんで午後は御所の周囲をまわって北野天神、金閣寺を見学。最後には幾つかの店をまわって買物をして締めくくるというコンパクトながらもポイントを押さえたものとなっている。

千年の王城としての京都を少しでも理解しようとするれば、日本の歴史についての知識が不可欠となる。サトウもチェンバレンも日本文化への理解を深める中でそのことを痛感していたものか、『旅行案内』は簡潔ながら京都の歴史的な成り立ちについて触れている。まず天皇の代が変わるごとに王宮が移された大和朝廷時代から説き起こし、八世紀初めには奈良にそして784年以後は長岡京に首都があったことなど、かなり詳しい事情が説明される。古代の朝廷の移動について「故人となった親の家には住み続けられないという古代の習慣」によるとしているのはいかにも古事記の研究者であったチェンバレンらしい記述といえよう。そして現在の京都に首都建設が始まったのは桓武天皇の治世にある793年であること、当時の中国の首都である長安を模して作られたこと、幸運を得るために「平和の都」すなわち「平安京」と名付けられたこと、ごく短期間に終わった平清盛の福原遷都にまで触れている。一方南北朝時代の混乱や応仁の乱に関しては、街や御所を焼失させた幾度もの火災の一つといった扱いで特に記述はない。ただ焼失の度にこれらの建物が元の様式で再建されたことが述べられているのは、再建の年を見れば必ずしも古いとはいえない現在の建物が、創建当時のものでないことによって必ずしもその価値を減ずるものではないということを示すためと思われる。

旅行者が実際に現地におもむいた際に重要になるのは最低限の土地勘であろうが、都市計画に関する考え方が異なる文化圏においては簡単な予測すらつかないことが多い。『旅行案内』は京都の街の規模を紙上で、なるべく具体的に説明しようと試みる。まず東西3マイル南北3.3マイルの街の外形、御所が北辺の中央に全体の15分の1の面積を占め、その大きな門からは街の最南端の門まで幅280フィートの通りが続くこと。街の東西を突き抜けるように幅170フィートから80フィートの通りが9本走り、それぞれ一条、二条と名付けられ九条まで続いていること。これらの通りと直角に交わる、似たような通りも同じ間隔で南北に走り幅は40フィートほどであること。街全体の外側には二重の掘割が取り囲み、主要な通りの端には門

が設けられていること。これらの記述から旅行者は臆気にはあるが目的地の広さを想像することができたであろう。それとともに今日の我々も、明治初期に京都を訪れた外国人旅行者が京都を閉鎖的で隔離された神秘的な都と表現したのは、単に山に取り囲まれた地形や時代の情勢に取り残された雰囲気を表していたばかりではなく、文字通り京都が堀に囲まれ外界から隔離された独特な都市景観を持つ街であったことを知ることができるのである。

『旅行案内』においても京都の住所は本来の表示のまま示されているので、京都の地名のシステムにも紙幅が割かれている。南北と東西の通りを座標とする京都の街は、まずその交差点を地名とし、そこから東西にずれる場合は「入ル」を使い、南北にずれる場合は北に向かって高くなっている地形に基づいて北上することを「上ル」南下することを「下ル」とすることが要領よく説明される。

本来は京都の季節の風物のところで取り上げられてもよいと思われるのが左右の大文字の説明である。8月16日に盆の締めくりとして行われる送り火は京都の行事の中でもかなり魅力のあるものと思われるからである。しかし文字自体は一年を通して確認できるため地理的な記述に含めたものであろうか。右の文字が裏返しになっているなどという記述は、おそらく外国人旅行者にとっては細かく観察しなければ気が付かないであろうことだけに「日本の文字」に造詣が深かったチェンバレンの関心に従ったものと思われる。

2 『日本旅行案内』の中の京都観光

次はいよいよ「見るべき」場所、つまり個々の観光地に関する記述となる。特に詳しく述べられているのは、御所、金閣寺、二条城、三十三間堂、西本願寺、清水寺、高台寺、知恩院、黒谷、銀閣寺など一日コースにも入れられる重要な観光地がほとんどであるが、その他にも三十か所以上の大小様々な場所があげられている。以下にどのような場所がどのような点に留意して紹介されているか、またその記述によって当時の欧米人が日本に何をしようとしていたのかを考察したい。

実際には見学することが難しい「御所」は、せめて紙上見学だけでも楽しめるようにという意図からか、あるいは先述したような御所に代わる同種の形式の建物を見た際に、より容易に御所の様子を想像することができるようにという配慮からか、もっとも詳しく説明されている。各種の旅行記は観察者の主観によるために状況によって建物の印象が変化してしまうが、『旅行案内』はあくまでも客観的に確認できる外観を淡々と説明することに徹している。屋根付きの堀に取り囲まれた御所は約26エーカーの広さで六つの門を有し、堀と御所の間は公園となっていると述べているが、旅行プランのところで外側だけでも見るように勧めているのはこの公園部分つまり今日の京都御苑のことと思われる。

訪問が許された見学者たちはMi Daidokoro Go-mon あるいは「威厳のある台所の門」から中へ入ったということになっている。これは現在の清所門であろうか。記帳を済ませて控えの間へと進む。ここの「セピア調のデッサン」の描き手は当時の日本美術界では知られていたらしいが今日一般には知られていないことからあまり高名ではなかったと推測される。しかしそのような画家の名前まで記載されていることに当時の欧米の旅行者の日本美術への関心の高さをうかがわせる。彼らにとっては日本美術こそ何をあっても「見るべきもの」だったのであろうか。後述の名所においても建物の様式や特色より天井画や襖

絵、彫刻などの説明が優先されている。

御所で見学者たちが最初に向かうのは「清涼殿」である。この東向きの63フィート×46.5フィートの建物は元来天皇の日常生活の場であり清らかな涼しい広間という意味を持つと解説される。さらに扉の中央に蝶番を持つアコーディオン式の扉、屋根から鉄のロッドで釣られた蝶番付きのシャッターすなわち蓐、螺鈿や象眼で飾られた椅子など、遥か昔に伝えられた中国の様式が、容易には変化しない宮廷の様式に埋め込まれたことで日本に残ってきたことに注意が喚起されている。また天皇が地面に降りずに祖先に対して土の上で礼拝するために、清涼殿にはわざわざ人工的な土の場が設けていることが述べられているのは、そのことが当時の欧米人にとって一種の民俗学的興味をそそる事象であったからともとれるであろう。

新年の謁見や天皇の即位など重要な儀式に使用される「紫宸殿」についても天空の真の色である「紫」と「神秘的な」という意味を持つ「宸」という字を組み合わせた名前の由来から説き起こす。紫宸殿に描かれた中国の賢人図は888年に「巨勢金岡」によって描かれたが、オリジナルはとうの昔に破壊され現存するものは幾度もの模写を経たコピーであると説明される。ここで唐突に巨勢金岡の名前が登場することには驚かされよう。名前は有名であるが作品が現存しないために様々な逸話のみで知られる伝説の絵師だからである。しかし『日本旅行案内』は具体的な旅行案内の前に日本全体の地理や歴史、気候、風俗習慣、宗教、簡単な旅行用の日本語会話など日本についての基礎知識をまとめており簡単な人名事典も含んでいる。そこにあげられた名前を見ると、政治の表舞台で活躍した人物より、読本や講談、歌舞伎などで日本人に広く親しまれ名所旧跡と分かちがたく結び付けられた歴史・伝説上の人物であることが多い。巨勢金岡も「現代風のこころを持った」「日本最初の偉大な画家」(『チェンバレンの明治旅行案内』109ページ)と紹介されているのである。

紫宸殿に置かれていた玉座は当時の実用に合わせてライオンやユニコーンの意匠で飾られた洋風のものであったらしいが、和洋折衷も欧米人にはかえって面白く思われたのかもしれない。また建物の十八段の階段は朝廷の位の数であり、位のない人々は一番下のステップに立つことになり「地下」すなわち「地面に降りた」ものとして「広間に入ることができる人」である「殿上人」と区別されたという。この身分の上下による空間的位置付けは日本建築の随所に現れるために『旅行案内』では繰り返し注意を促している。たとえば「御学問所」でも空間が三つに区分され、下段は低い身分の人々用、中段は貴族用、上段が天皇自身の場所となっているそうである。ところで紫宸殿前には有名な「左近の桜」と「右近の橘」があるが、植物が位の名を持つことを、チャールズ二世がビーフ・サーロインにナイトを授けたという欧米人に馴染みのあるエピソードと比較しているのは面白い。

「北野天神」ではまず二階建ての「三光門」に目が向けられる。梁間の太陽、月、星の彫刻は区別が難しいとしているが、実際には三光というのは三日月、日の出、日の入りだということである。社殿は華やかな彫刻が施された権現造りで外国人観光客に好まれていた日光の東照宮より古いこともあって、もっと注目されてもよいと思われるが、ここでの解説はむしろ社殿内部の奉納物に向けられる。中でも西陣織と思われる、織物の手工業者たちが広告を兼ねて奉納した「三十六人の詩の天才(三十六歌仙)の織られた肖像」に注目しているのは、観光の対象が必ずしも歴史的・美術的に価値のあるものばかりでな

く、見る側にとって珍しく興味深く感じるものであればよい、いわゆる真正性は問われないということを端的に表しているといえるのではなかろうか。

「金閣寺」ではまず「日本の美意識の典型」とした風景庭園の様子が語られる。松に覆われた岸と松に覆われた小島を持つ池は大都市にあるとは思えないほど静かで、水草と鯉がたゆとうその池のほとりに黄金のパビリオンが建っている—淡々と説明されても十分に旅行者の想像力をかき立てる情景である。実際、現在でも外国人旅行者にとっては特に印象深い所として真っ先に名前が上がる観光地の一つである。金閣そのものについては一層ごとに異なる建築様式より、内部の仏像や狩野正信によって描かれた芍薬の天井画などの記述が中心となる。数字的なデータにこだわる欧米人らしく屋根の鳳凰像も約3フィートと明記されている。足利義光の足跡をしのばせる茶の湯用の銀河水や手洗い用の巖下水などは日本人には興味深い、外国人にとってはさして重要ではないというアドバイスは実に冷静である。しかし方丈や書院には注目するよう勧めている。中心はまたしても日本美術である。方丈には狩野探幽による中国の聖人などを描いた襖絵があり、書院は若冲の絵で飾られている。また尾形光琳や相阿弥の屏風、周文、雪村、応挙らの掛軸など多くの美術品を所蔵し、時折展示している。しかし最も評価されるべきは「兆殿司（吉山明兆）」の筆によるという三人の宗教指導者、孔子、仏陀、老子を描いた絵であるという。この兆殿司について『旅行案内』の人名欄では、日本美術をいち早く西欧で紹介したウィリアム・アンダーソンが、僧侶の余技という域をはるかに超えた独創的な宗教画を描いた人物として「日本のフラ・アンジェリコ」と評していることを紹介している（『チェンバレンの明治旅行案内』100 ページ）。

「等持院」にも狩野派の襖絵と掛軸が所蔵されているが、ここではむしろ足利歴代の将軍の木像の紹介に力点が置かれる。また仁和寺として知られる「御室御所」は1887年に焼失して五重塔や門などしか残っていないとしているが、実際には江戸期の御所の紫宸殿や清涼殿を移築した金堂・御影堂が残されている。江戸初期の御所建築を知る上では貴重な建物であるが『旅行案内』はそれには触れず桜は名高いが特に時間を費やす必要はないとしている。あるいは所蔵美術品が少ないことが低い評価の一因であろうか。そうだとすれば竜安寺についての記述が見られないこともうなずける。現在は世界文化遺産にも登録され禅の心を表現した哲学的な庭として広く知られている竜安寺の石庭に『旅行案内』は全く触れていないのである。当時の「見るべきもの」は今日とはまた違っていたであろう。「妙心寺」については多数の美術品の所蔵、仏殿や経堂の彫刻について述べているが、中心はなんといっても「八方睨みの竜」として知られている狩野探幽の筆になる法堂天井の巨大な竜の絵であろう。しかし編者たちには竜の視線が感じられなかったのか「八方睨み」という記述はない。「大秦」と表記された広隆寺は朝鮮渡来の仏像を所有しているが、寺は非公開で仏像は博物館で展示されるのでそこで見るように勧めている。「嵐山」では桂川の眺望と桜と楓の植林にまつわる歴史に触れ、様々な物語と歴史を秘めた嵯峨野では、東大寺の僧侶奄然が987年に中国から持ち帰った仏像を安置している「嵯峨釈迦堂（清涼寺）」のみが紹介されている。

桃山文化の影響を残し多くの襖絵を持つ二条城は「見るべきもの」の多い場所である。見学者は華麗な彫刻が施された「唐門」から、これまた金で彩られた芍薬と鳳凰の彫刻を持つ玄關「御車寄」へ向かう。二の丸御殿の外見については、贅沢に金

を張った上に並外れて大きく大胆に彩色された豪華な外観で、小さく繊細なことを重んずると一括りされがちな日本美術の伝統にあって、例外的に荘厳さや力強さ豊かさを見せていると評している。あるいは編者たちも、日本の美術が単に「小さく繊細」というキーワードのみで語られることに抵抗を感じていたのかもしれない。しかし一方では「釘隠し」や伏見城から移されたという左甚五郎作の欄間といった細部の美しさにも目を配っている。釘隠しは釘のあとを装飾的にカバーするものであり、欄間については透かし彫りでありながら裏と表では図柄が違うことを紹介している。御殿には幾つもの部屋がつらなっており、まずは竹と虎が描かれた侍の控室、楓や花咲く木々が描かれた大名の控室、老中の間の入り口には狩野探幽の「八方睨み」の獅子の絵が描かれている。今回は「見る人がどこに立っても真っ直ぐ見つめているようにみえる」と紹介している。「御対面所」は狩野探幽の雄大な松の絵に取り囲まれ金で装飾された豪華な広間で、将軍が諸大名にその威光を示すのにふさわしかったであろうと想像している。ここでも身分によって空間が分かれ、上段は将軍のためにあり一般の人々は下段にいたとの説明が加えられる。小堀遠州によってデザインされた庭園を眺めながら「黒書院」へ移る。ここには狩野直信が装飾を手掛けているが、最初の部屋は松とコウノトリ、次の応接室は全面を金で飾った上に満開の桜が描かれ、違い棚には初期の七宝細工も使われていることに注目。「白書院」は他の部分と違って襖も鈍い金色であり、褐色やくすんだ色合いで中国の風景が描かれる。しかし結局二条城において一番の見物は、白書院の二羽の眠っている雀の絵、扇と菊の浮き彫りのある部屋、大広間の裏の松と鷹の絵、左甚五郎の欄間、狩野直信の雁と鷺の絵の部屋、とここでも美術中心の観光となる。なお有名な「鶯張りの廊下」については知恩院では注目しているがここでは触れていない。一般に公開された観光地としては日が浅かったためにまだ見学のポイントが整っていなかったのかもしれない。

1930年代にブルーノ・タウトによって「涙が出るような偉大な建築」「日本建築の世界的奇跡」と絶賛され、現在ではすっかり日本建築の代表のように思われている「桂離宮」も『旅行案内』ではさほどの扱いは受けていない。確かにここが通常の日建築とは異なる作りであることに触れているが、それより狩野派の愛好者、特に探幽ファンにとって見る価値があることのほうが重要らしい。内部の襖絵には探幽の小品が完璧な状態で残っており、随所の木製の引戸に狩野派の絵が見られることにも注意を促している。「月見台」は外に張り出した竹枠のベランダで月が松の木々の上に昇るのを見るために使われると説明される。庭園は茶の湯のために設計され、人工の川がひかれ、池には小島が浮かび、苔むした岩や石灯ろうがおかれ、橋や石畳など様々に趣向が凝らされている、と列挙されるもののあまり評価しているようには感じられない。七つの茶亭については一言の説明も見られず、名高い月波亭に関する記述も皆無である。この時期にはまだ桂離宮は見出しされていなかったといえよう。

「東寺」は寺そのものよりその近くに「羅城門」があったため大江山の鬼の伝説と関係付けて説明される。また毎月21日の「弘法さん」や4月の太夫の道中は注目のイベントとしてアナウンスされている。意外に紙幅が割かれているのは「伏見稲荷」である。まずそこへ至るまえに立ち並ぶ店には「伏見人形」がおかれていることに触れた後、稲の神様という「稲荷」の由来、この地に神社ができた縁起が詳しく語られる。さらに門の両側に控える大きな狐、柱はすべて赤で壁は白、奥の院へ向か

う道には鳥居が数知れずトンネルのように続く、と伏見稲荷の様子が描写される。見た目に華やかで不思議なものが多いこの場所は旅行者にとっては面白いポイントだったであろう。奥の院からは山にある洞穴をまわる「ほら巡り」があるとしているが、現在は「お山巡り」といい、参道に沿って祠や塚をまわるようである。伏見稲荷からさらに東南に離れた「醍醐寺」については、人力車でホテルから一時間半との所要時間の説明から始まり、狩野山楽の絵や桃山城から移された襖絵が見られることをあげている。秀吉の花見の話など歴史的なことには一切触れていない。再び京都近郊に戻って「東福寺」は溪谷にかかる「通天橋」から見る紅葉の素晴らしさによって注目される。しかもこの通天橋を含む廊下と塔のある屋根は独特なものであると評している。塔のある屋根とはおそらく開山堂の楼閣「伝衣閣」を指していると思われるが、確かに一般の日本建築とは異なる中国風の不思議な雰囲気を持っている。このように『旅行案内』は背景となる知識が少なくても直ぐに見て取れるような、歴然とした分かりやすい美しさ、典型的なものばかりでなく少々デフォルメされたような極端なものにウェイトをおく傾向にある。次の三十三間堂はある意味そのような趣味のクライマックスともいえるであろう。ところで東福寺の寺宝は、兆殿司の掛軸であるだけに情報は詳しい。「五百羅漢図」と24フィート×48フィートの「涅槃図」があり、「涅槃図」は年一回3月15日に開帳されるが、他のものは公開の時期は決まっておらず原則的には非公開であると伝えている。

広大な敷地を持つ東福寺に隣接する「泉涌寺」は十三世紀から十九世紀に至る天皇の墓所であるが墓は非公開で見られるべき寺宝もないとしている。百年に一度しか開帳されていなかったという秘仏の楊貴妃観音像については当時知られていなかったか、非公開も同然として触れられなかったのであろう。ただ10月8日に公開されるブツの歯は、大衆の信仰を集めているが大きさからいってもっと大きな四つ脚獣、おそらくは馬のものであろうと科学的な見解を述べている。この泉涌寺と東福寺の間には「夢の浮橋」と呼ばれる小さな木製の橋が架かっており、目立つものではないが一言触れておく価値があるという。この橋については現代の旅行案内書はなにも触れていないが、『旅行案内』によれば天皇の埋葬の際、真夜中に葬送の行列が墓所にむかうときに、菓子や果物といった腐敗しやすい供物をこの橋から下の小川に向かって投げ込んだという。いわばあの世とこの世の境の橋であったのかもしれない。

「三十三間堂」ではまずその横に長くのびたユニークな建築、そして大量の仏像に強い印象を受けるであろうことが語られる。『旅行案内』はここが三万三千三百三十三の観音のイメージの寺としているが、実際には五フィートの大きさの観音像が一千体、十一面の千手観音が一体あって、それぞれが冠や光背などにより小さい観音を付けているためトータルでは先の数字となると伝えている。しかしこれは実際の仏像の数と言うより、観音は衆生の救済に際して三十三の姿で現れるという理論上の数字によるものではないかと思われる。また300体の像は康慶ら、200体は運慶、残りは七条大仏師によるもので、まったく同じものは二つとないとしているが、実際は124体のみが創建当時のもので残りは1249年の大火の後に補われたものだという。この部分に限らず彫刻や絵画に関しては作者が誰であるか、誰の作品かということは常に重視される。このような傾向は、個性を重んじ天才を崇拜した十九世紀的な芸術観の表れともとれるかもしれない。しかし『旅行案内』はまだ日本美術への研究が十分に行われていない時期に書かれているだけに、この天

才崇拜はややもすると様々な傑作を有名な芸術家のみの功績に帰することになる。たとえば「智積院」では長谷川等伯一派が描いた障屏画、特に「桜図」と「楓図」が有名であるが、『旅行案内』には等伯の名前は見られず「桜図」も狩野直信のものとされている。それというのも長谷川等伯は明治・大正のころまでは水墨画の傑作である「松林図屏風」の作者としてのみ知られ、優れた水墨画家という評価しか受けていなかったからであろう。ようやく昭和になって障屏画の研究が進むにつれて、この智積院の障屏画が長谷川等伯らの手になることが解明されたのである。また智積院の庭園についても、確かに池泉回遊式で座る場所によっては実際以上に奥行きを感じさせる凝った設計ではあるが、千利休によるという『旅行案内』の記述はおそらくあやまりと思われる。

一方、天才の傑作に全くスポットが当てられていない例もある。三十三間堂の向かいにある「養源院」の場合である。ここには俵屋宗達を描いた白像や唐獅子の絵があり、現在は江戸前期の極めて完成された装飾芸術の例として注目されている。その奇抜なデザインとユーモラスにデフォルメされたフォルムは現代にも通じる非常に魅力的な作品といえる。方丈の襖も宗達の手になるほか、狩野山楽の作品も所蔵されているということで「見るべきもの」は多いように思われる。ところがここで注目されるのはもっぱら「血天井」なのである。養源院の天井は1600年の関ヶ原の戦いの際に家康の家臣鳥居元忠が寄せ手の西軍に伏することなく城を死守し遂には自害した伏見城の床板であるといわれている。城内の遺体は長く放置されたため、床板には倒れた人の形のままだに血の跡が残った。そこで1621年に淀君の妹にあたる二代將軍徳川秀忠夫人が供養のためにそれらの床板を養源院の天井板として使用し、徳川の菩提寺としたのであった。今日でも四百年以上前の戦いの際に残った手と槍の形をガイドが示してくれる。『旅行案内』の時代もやはりガイドは天井板にはっきり残る人の頭や足の形を示してみせたようである。しかし『旅行案内』の血天井の由来については幾つかの誤解があるように思われる。天井が伏見城の床板であることは同様であるが、伏見城で戦闘が行われた時期を1615年の大阪夏の陣の間としており、城内にいたのは豊臣秀頼の家臣384名、主君が大阪で敗北し自害したのを聞いて切腹したというのである。そして遺体は何年間も放置されていたが、三代將軍家光が主君への忠誠心を称え、足元に敷くに忍びないということで天井に張ったと語っている。こうして比較すると歴史的な事実とはともあれ『旅行案内』の説明の方が話としては感動的であるかもしれない。徳川家が自身に忠誠を尽くした戦士たちを弔うのは当然であり、供養まで21年かかっているのはむしろ怠慢ともみえるからである。

『旅行案内』は現在の京都国立博物館の前身と思われる「帝室(?)博物館」について、奈良の同種の博物館とならんで初期の仏像に関してかなりのコレクションを持っていると述べている。『旅行案内』初版の著者のひとりアーネスト・サトウは準備室だった頃から既にこの博物館にかかわっており、『旅行案内』の執筆協力者たちはこのコレクションについてかなり詳しく推測される。『旅行案内』によれば開館時間は、夏期は午前8時から午後5時か6時まで、冬期は9時から4時まで。毎月10日、20日、月の最後の日、12月の20日から1月1日を除いて毎日開館していたらしい。この予定からみると日本でも曜日による休みをとらない公共施設があったことが分かる。博物館は京都やその周辺の地方の寺から必要に応じて美術品を借用したばかりでなく国宝として接収することもあった

らしく、コレクションは相当多岐にわたっていたようである。ここには七、八世紀の朝鮮半島の影響下にある仏教彫刻、そして掛軸や障屏画を始めとして、古い書状、刀剣、鎧、面、楽器、貨幣、天皇の衣服、雑多な家庭用品、刺繍など各種のものが納められていたらしい。おそらく様々な興味を持った旅行者に、幅広く対応できる見学ポイントであったであろう。

東大路を越えて博物館の裏手にあたる「妙法院」には巨勢金岡によるといわれている掛軸や十六世紀末の朝鮮国王の装束、十六羅漢の掛軸、狩野永徳の襖絵などがあると紹介されている。実際には美術品ばかりでなく豊臣時代の海外との交流を示す書状など珍しい資料もあるとのことであるが、そこまでは触れられていない。次に記述される「大仏」は、寺の名前は書かれていないが豊国神社に隣接する方広寺に現在石垣のみが残る大仏のことであろう。『旅行案内』によれば 1588 年に建立されたが、度重なる火災と地震で壊れて現存する物は 1801 年再建の木像であり、しかも頭と肩のみで胴体はないと断りながらも 58 フィートという全体の高さ、顔の縦横、眉毛の長さや目の大きさなど顔の細部に至るまで細かくサイズを記載している。しかしこの大仏がそもそも豊臣秀吉が奈良の大仏をまねて作ったもので建立当時は大仏殿も存在したこと、建立からわずか十年後に大破したのを秀吉の息子秀頼が再建したこと、その際に次に述べる大鐘もつくったが、その鐘に刻まれた「国家安康」の銘が関ヶ原の戦いを引き起こす歴史的ないがかりに発展したという有名なエピソードは語られていない。話としては面白いが日本史についてのかなり詳しい知識がなければ理解するのは難しいと判断されたのかもしれない。したがって鐘の記述ももっぱらその大きさに注目し、京都の知恩院、大阪の天王寺、奈良の鐘とならんで日本で最も大きい四つの鐘の一つであるということが述べられるのみである。その豊臣秀吉がまつられている「豊国神社」は伏見の桃山城から移したという「唐門」が注目される。もっとももとの本殿は徳川家康に取り壊され、現在の本殿は 1880 年に再建されたものであるからこの門が唯一桃山の遺構として「見るべきもの」であったのかもしれない。

ここに至るまで様々な「見るべきもの」が示されてきたが、一般に室町・桃山時代の芸術品や建築への評価が特に高いように思われる。その理由の一つは、それら二つの時代には海外との交流が盛んであったために、外国人にとって分かりやすいきらびやかな美しさを備えた芸術品が多く生み出されたためであろう。しかし今一つは明治期の芸術評価に関する一定の傾向が関係していると思われる。明治維新はその直前の江戸幕府の存在を否定することによって始まったのであり、明治初期にはそれまでの日本の芸術のほとんどが否定され、顧みられることがなかったというのは周知の事実であろう。さらにこれまで見たように明治期に行われたさまざまな「再建」は朝廷関係の建物はもちろん室町時代のものや豊臣秀吉が残した建物の遺構などにまで及んでいるが、それらはいずれも徳川幕府によって取り壊されたり捨て置かれたりした建築ということになる。つまり明治期には徳川時代に否定されたものを評価し直すことで、逆に徳川時代の価値観を否定しようとしたともいえるのである。そのような傾向に当時の芸術評価も巻き込まれていた可能性がある。

その観点から見ると「西本願寺」は明治期の観光において二重に評価が高まった可能性がある。まず外国人にとって理解しやすい美しさを備えていたこと。そしてもう一つは江戸時代を否定した明治の風潮に合致していることである。つまり伏見城や聚楽第から移築された建物が西本願寺に存在すること自体、

徳川幕府が豊臣家ゆかりの建築物をすべて破壊しようとしていた政策の結果であり、西本願寺の美術を肯定することはそれらを抹消しようとした徳川幕府を否定することにつながるのである。しかし『旅行案内』自体は西本願寺がそのような経緯によって豊かな桃山文化の継承者になったことには一切触れていない。まず至るところ美しい菊花の彫刻で埋め尽くされた門を賞賛しながら、鳥が内部に巣を作るのを防ぐために金網がかけられているという即物的なことにまで解説が及ぶのは観賞の際にほぼ煩わしく感じたためであろうか。境内の大きな銀杏が水を吹き出して寺を大火から守ったというエピソードに触れた後「本堂（阿弥陀堂）」の描写に移る。本堂内部は長さ 138 フィート×奥行き 93 フィートで畳敷きの部分は 477 畳。外陣は樺造りで簡素な襖で囲まれ太い柱の上の棟木の端は白く塗られている。内陣の両側には金色にかがやく柱と壁を持った二つの広々とした部屋があり、蓮の彫刻で飾られている。それらの部屋には紺地に大きな金文字で阿弥陀への祈りが書かれた掛軸や、この宗派の歴代の指導者の肖像の掛軸が掛けられている。外陣の正面は完全に金色に輝き、格子状の折り畳み戸と襖には雪に覆われた桃や松、竹が描かれ欄間にはボタンが咲きこぼれる。軒の蛇腹部分も複雑な模様で飾られている。内陣の中央には花の彫刻に飾られ、キラキラと極彩色に彩られた厨子があるが、そのなかに安置されているのは黒い木で作られた開祖自身の手によるといわれる高さ 2 フィートの開祖座像だという。一説にはこの座像に塗られた漆には親鸞上人の遺灰が混ぜられているともいわれているが『旅行案内』は触れていない。厨子の前に設けられた木製の祭壇の正面は金地を背景に花や鳥を透かし彫りした何枚もの小さなパネルに分かれ、建物の中心部分は金箔を張られて彩色され天井には七宝も使われている。高い祭壇の上にかかれた文字板には、この宗派の開祖の（贈られた）名前「見真」が漢字で書かれている。本堂よりは若干小さい阿弥陀堂も 96 フィート×奥行き 87 フィートあり、同様に区分されている。内陣の両側にある二つの 30 フィート×36 フィートの部屋のうち、一つだけがくすんだ金色の壁を持ち、彩色された装飾が描かれた紙が天井に張られ、聖徳太子の肖像画や浄土宗の開祖である法然を含むインド、中国、日本の賢者を描いた七賢の掛軸が掛けられている。金に輝く細い柱とバランスよく配置された菊の模様も美しい厨子には有名な春日仏師による 3 フィートの高さの阿弥陀仏が納められている。特に見ておかねばならないのは祭壇の右側の入り口に近いところの襖絵で、金地に雌雄の孔雀が満開の桃の木に止まっている図柄である。狩野派の絵師によるものであろうと推測されている。さらに一般公開はされていないが、狩野派の絵によって宮殿のように飾られた建物があるとしているのは聚楽第の遺構として有名な飛雲閣であろうが詳細については触れられていない。勅使門ともいわれる唐門に関しては「日暮門」の異名をあげているが、そのいわれは『旅行案内』が述べているような、門を眺めていると日が暮れるということではなく、西本願寺を見ていると一日かかるので門の辺りで日が暮れるということであるらしい。しかしこれも話としては『旅行案内』の記述の方が面白く感じられる。

対する「東本願寺」は何回もの火災で焼失し、1895 年に再建されたばかりであったため、その巨大な本堂についても数字的には詳しいが美術的には記述が少ない。長さ 230 フィート、奥行き 195 フィート、高さ 126 フィートと西本願寺の倍以上の面積を誇る。ただし再建時の様子を通して、この寺がいまだに日本の民衆にとってアクチュアルな信仰の場であることは感じられたものか、再建のための全国からの寄進、髪の毛で作られ

た綱などについて触れている。

以上洛中から洛西、伏見を経て洛南についての『旅行案内』の記述を概観した。これで京都観光一週間の日程のうちおよそ半分となる。東山界隈から洛北に関する記述はさらに詳細である。しかもこの界隈に関しては、興味深いことに、かつて観光地として名前が挙がったポイントが今ではそれほど重要な観光地とはなっていないのである。ちょうど今回観察された見解とは逆の傾向となる。そこでこれらの地域の記述に関してはまた稿を改めて論ずることとしたい。おそらくそのような変化には、それらの場所にあった仏像や襖絵や掛軸といった「見るべきもの」が博物館に納められるようになったという事情もあるであろうし、なにより「見るべきもの」の基準が変わってきたことが考えられる。もちろん清水寺、高台寺、知恩院、銀閣寺など

は現在も不動の人気を誇っている。八坂の塔、円山、祇園神社、南禅寺なども名高い一画である。また粟田御所（青蓮院）や黒谷、永観堂、下鴨、上賀茂、修学院離宮なども知るひとぞ知る名所である。しかし真如堂などは平家物語の熊谷直実の物語なしには観光地として成立しがたいであろうし、西大谷や東大谷も宗教的意義以外の価値は認めがたいかもしれない。『旅行案内』では明治維新に活躍した人々の墓がある霊山寺界隈や招魂碑について述べられているが、そのような政治的背景を持った観光地は最も栄枯盛衰が激しい。人々が求める物語が変われば、スポットが当たる場所も異なるのである。その意味では外国人と日本人では物語の持つ意味が異なり、明治期と今日では求められる物語が異なることが観光地変動の一つの鍵となっているといえよう。

参考文献

- アーリ・加太 訳：観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行 東京 1995年
 アーリ・吉原 他訳：場所を消費する 東京 2003年
 秋山光和 編：世界美術全集 第5巻 平安(Ⅱ) 東京 1965年
 ブレンドン・石井 訳：トマス・クック物語—近代ツーリズムの創始者 東京 1995年
 Chamberlain, Basil Hall/ Mason, William Benjamin : A Handbook for Travellers in Japan (9th ed., 1913) . Collected Works of Basil Hall Chamberlain: Major Works. Volume 8. Bristol, Tokyo 2000
 チェンバレン・高梨 訳：日本事物誌 1, 2 東京 1969年
 チェンバレン/メーソン・楠家 訳：チェンバレンの明治旅行案内—横浜・東京編 東京 1988年
 Dauthendey, Max : Die geflügelte Erde. Ein Lied der Liebe und der Wunder um sieben Meere. Muenchen 1910
 Dauthendey, Max : Die acht Gesichter am Biwasee. Muenchen 1973
 Dauthendey, Max : Sieben Meere nahmen mich auf; ein Lebensbild mit Dokumente aus dem Nachlass und 19 Abbildungen. Hrsg. von Hermann Gerstner Muenchen 1987

- グリフス・山下 訳：明治日本体験記 東京 1984年
 橋本和也：観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方 東京 1999年
 石井研堂：明治事物起源 東京 1997年
 レシュブルク・林 他訳 旅行の進化論 東京 1999年
 ロティ・村上 他訳：秋の日本 東京 1942年
 前川久夫 編：ひとり歩きの京都 東京 2003年
 ミットフォード・長岡 訳：英国外交官の見た幕末維新 東京 1998年
 ミットフォード・長岡 訳：ミットフォード日本日記 東京 2001年
 モース・石川 訳：日本その日その日 1, 2, 3 東京 1971年
 サトウ・坂田 訳：一外交官の見た明治維新 東京 1960年
 サトウ・庄田 訳：日本旅行日記 1, 2 東京 1992年
 ジーボルト・斉藤 訳：江戸参府紀行 東京 1967年
 谷 信一 編：世界美術全集 第7巻 室町 東京 1965年
 タウト・森 訳：ニッポン—ヨーロッパ人の目で見えた 東京 1991年
 トゥアン・山本 訳：空間の経験 東京 1993年
 山下晋司：バリー—観光人類学のレッスン 東京 1999年
 山根有三 編：世界美術全集 第8巻 桃山 東京 1965年
 吉沢 忠 編：世界美術全集 第9巻 江戸(Ⅰ) 東京 1965年